

2 研究の実際

(1) 理論研究

ア 自立活動について

(ア) 自立活動の時間について

自立活動とは、特別支援学校や小・中学校、義務教育学校の特別支援学級、通級による指導の教育課程において、特別に設けられた指導領域です。自立活動の指導は、授業時間を特設して行う自立活動の時間における指導を中心に、各教科等における指導と密接な関連を図りながら、学校の教育活動全体を通じて適切に行います（図1）。

自立活動の時間に充てる授業時数については、教科と異なり標準時数としては示されておらず、各学校が個々の児童生徒の実態に応じて、適切な授業時数を確保する必要があります。

本研究では、自立活動の時間における、児童生徒の「できる」を増やす授業づくりに取り組みました。自立活動の時間における指導は、個々の児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を的確に把握して、適切な指導計画の下に行うよう配慮しなければなりません。そのため、自立活動の指導が難しいと感じている教師は多く、具体的な指導の考え方や進め方について自信をもつことができない教師も多くいる現状があります。そこで、自立活動の時間について、教師が実際の指導・支援に具体的なイメージをもちながら授業づくりを進めていくことが大切だと考え、研究を進めました。

(イ) 自立活動の指導について

自立活動の指導は、個々の児童生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする取組を促す教育活動であり、個々の児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に即して指導を行うことが基本です。そのため、自立活動の指導に当たっては、個々の児童生徒の的確な実態把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、個別に指導目標や具体的な指導内容を定めた個別の指導計画が作成されています。また、児童生徒の学習状況や指導の結果に基づいて、PDCAのサイクルを確立し、適切な指導を進めていくことが極めて重要です。

児童生徒の学習状況や指導の結果を評価するに当たっては、指導目標を設定する段階において、児童生徒の実態に即し、その到達状況を具体的に捉えておくことが重要です。そのため、どのような場を想定し、何を、どのような方法で理解させるのかを明らかにしておく必要があります。また、児童生徒の具体的な行動や観察できる状態として評価が可能となるように、工夫することが必要です。

本研究では、自立活動の時間における、児童生徒の「できる」を増やす授業づくりについて、授業内容を考えていく過程や到達状況の基準の捉え方、評価を基にPDCAサイクルの充実を図りながら授業づくりを進めていくポイントについて示しました。そのことにより、多くの教師が自立活動の時間における指導の進め方について、具体的なイメージをもちやすくなると考え、研究を進めました。

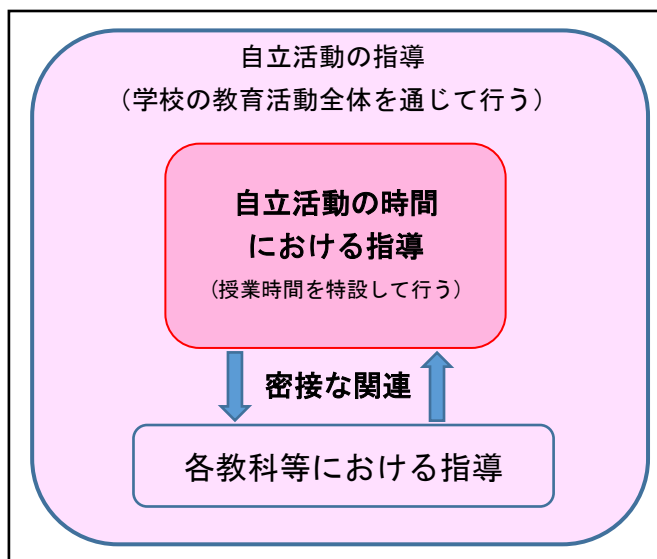


図1 自立活動の指導の概念図

イ 応用行動分析（ABA）について

ABAとは、アメリカの心理学者スキナー（B.F.Skinner）によって提唱された、人間（動物）の行動と環境との関係を扱う学問である「行動分析学」の成果を、人間社会で活用するために発展してきたものです。

人間の行動を発達や認知・思考、特性といった個人内の問題とせず、その場、そのときの状況や出来事といった周囲の環境との相互作用の結果として捉えること（図2）で、新しい行動の獲得や問題行動の解決などに応用していきます。また、人の行動を理解するために、行動、行動の前（きっかけ）、行動の後（結果）の3つに分けて分析することでその行動の目的を明らかにする分析方法です（図3）。このように、行動の前後の環境や結果を操作することによって、望ましい行動に変えていきます。

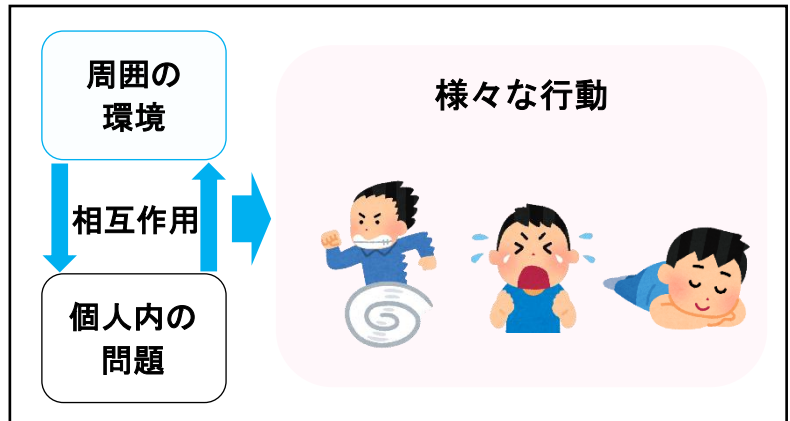


図2 ABAにおける行動の捉え方



図3 ABAにおける人の行動の理解の仕方

ABAは、個人の行動に焦点を当てるため、指導方法や支援方法は一人一人に応じたオリジナルのプログラムになります。評価する際は、児童生徒の具体的な行動等を記録し、分析することにより、客観性を高め、他の教師ともその過程を共有することができます。

ABAでは、適切な行動が起こりやすくなるように、環境を整えたり周囲の人たちの対応を変えたりするといった具体的な対応を行う際に、目標となる行動を分けて簡単なものから教育・学習していく技法であるシェイピングや、一連の行動の行程を分けて学習し、最後に一連の行動としてつないでいくチェイニングなど多くの技法が使われます。それらの技法の中で課題分析やスモールステップが用いられます。

本研究では、自立活動の時間について、教師が実際の指導・支援に具体的なイメージをもちながら授業づくりを進めていくことができるようにするために、課題分析及びスモールステップに着目しました。一人一人の実態に応じた学習内容を設定する際には課題分析を参考にし、本時の目標から到達状況の基準を設定する際には課題分析及びスモールステップを参考に研究を進めました。

(7) 課題分析について

課題分析とは、複雑な行動をより細かな具体的行動に分けたり、複雑な行動がどのような行動のつながりによって構成されているかを明らかにしたりすることです（次頁図4）。目標を達成するための課題を遂行するために必要となる全ての行動を明確にし、書き留めていくことで、必要

となる指導内容や指導方法を明確にすることができます。また、児童生徒がどの段階の行動でつまづいているかを明らかにすることもできます。

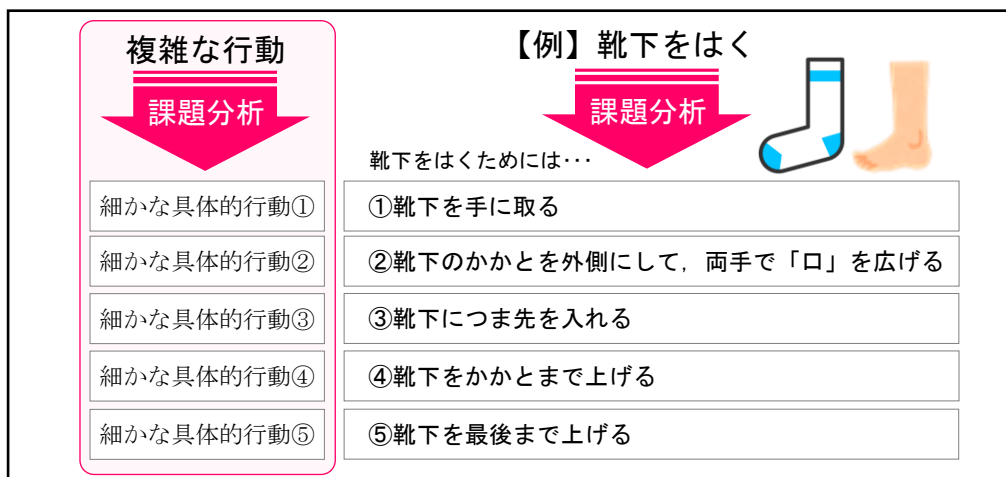


図4 課題分析について

(イ) スモールステップについて

スモールステップとは、目標とする事柄を細分化して学習しやすくするようにしたものです。初めから高い目標を設定するのではなく、目標を細分化し、細かい目標の達成を積み重ねながら最終的に高い目標に近付けていきます(図5)。目標を達成するまでに時間が掛かる場合や、難しい内容を達成しようとする場合には、モチベーションが低下しやすいため、目標を達成することが難しくなります。そのようなときに、スモールステップを活用することで、目標を達成するための課題が学習者自身にとって取り組みやすい内容になり、自分の実態に応じたペースで進めることができます。そして、学習者自身が小さな「できる」を積み重ねながら、最終的な目標を達成することができます。小さな成功体験の積み重ねから得られる達成感によって、学習者はモチベーションを高めながら目標を達成するための課題に取り組むことができます。

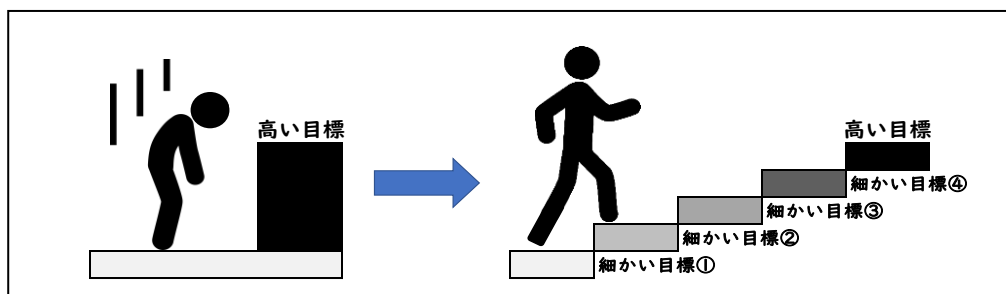


図5 スモールステップについて

ウ 本研究における課題分析及びスモールステップの活用について

(ア) 課題分析を参考にした学習内容の設定について

本研究では、具体的な指導内容を設定した後の授業づくりに焦点を当てています。本研究で取り扱う具体的な指導内容は、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(以下、学習指導要領解説自立活動編)に例として示されている「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例」(以下、流れ図)に基づいて設定したものです。学習内容の設定に当たり、まず、自立活動の時間で指導する内容を明確にするために、具体的な指導内容を「～できる」で区切って分けます(本研究では、『～できる』で分けた指導内容』と表記)。次に、その『～できる』で分けた指導内容』から、学習内容を考えます。その際に、課題分析の「より具体的な行動

に分ける」という方法を参考にし、児童生徒がどのような力を身に付けることが必要なのか、細かく具体的に複数思い浮かべます(図6)。児童生徒の実態から学習内容を選び、題材や教材、指導方法等を考えることで、授業内容がイメージしやすくなります。

※☞には、具体的な指導内容の設定について、関連する資料があります。併せて御活用ください。
 ☞学習指導要領解説自立活動編 P28「流れ図」
 ☞令和元年度個別実践研究「⑧_具体的な指導内容例(障害種別)」

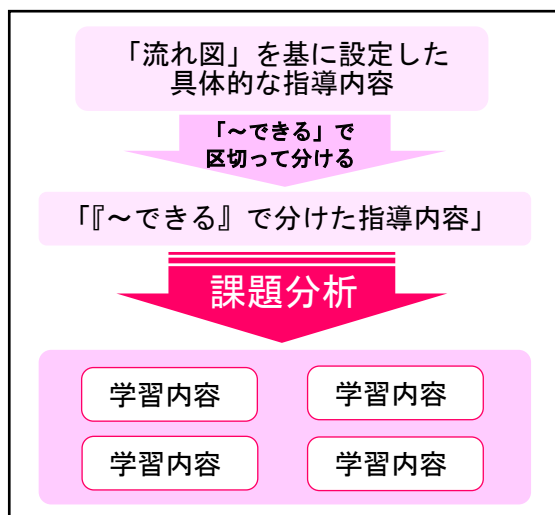


図6 課題分析を参考にした学習内容の設定

(イ) 課題分析とスモールステップを参考にした到達状況の基準の設定について

本研究では、授業の中で、児童生徒が本時の目標をどのくらい達成したかを捉えるために、到達状況の基準を設定しました。その際、課題分析の「より細かな具体的な行動に分ける」という方法とスモールステップの「細かい目標の達成を積み重ねる」という方法を参考にしました(図7)。

まず、課題分析を参考にし、本時の目標から考えられる児童生徒の「できる」姿を、具体的な行動や、教師が観察できるより細かな状態として、複数思い浮かべます。

その後、スモールステップを参考にし、より細かな状態として複数思い浮かべた児童生徒の「できる」姿を、児童生徒の実態に近い姿から段階的に積み上げました。これを本時の目標における到達状況の基準としました。

このような過程を踏んで、到達状況の基準を設定することにより、評価する際に、児童生徒と教師が共に到達状況を捉えやすくなり、目標の達成に向けて、児童生徒がどのように変容したのかを明らかにすることができると考えます。

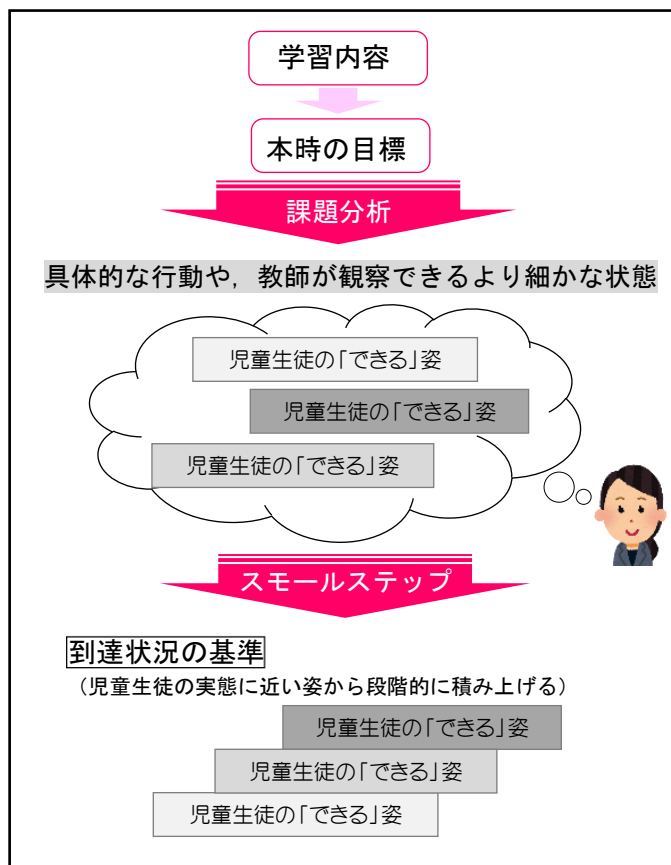


図7 課題分析とスモールステップを参考にした到達状況の基準の設定